



2重丸をつきたい 「1%まちづくり事業」

おおた 太田市長(群馬県) **清水聖義**

Masayoshi Shimizu



市の「1%まちづくり事業」であいさつする筆者

あつこいつ間の15年

市長になって15年。自分でも「ちよっと長いよね」と思ったりする。「高崎に比べればまだまだ」なんて励ましもあるけど、最近の傾向からすればちよっと異常かも。誰でもそうであるように、初当選は当時としては若かった、53歳。

「21階の高層市役所」をテーマにし、「ムダあり、問題あり」として市長選に出た。「低層階の市役所建設」を具体的に示した。基礎工事も終わっている段階で誰でもが変更は無理といていたが、「やればできる」低コストの市役所の建設を主張して



母校・太田高校での創立記念講演の様相

いくぐつてきたつわものばかり。彼らの誰でもが「改善」「コスト削減」を意識する。それが「ウマが合う」要因なのかもしれない。平成18年、彼らに「補助金の見直し」をお願いした。補助金検討委員会を立ち上げた。選挙の前に「補助金カット」なんて格好のいいことをやると、自分が格好悪いこと(落選)になったりする。「補助金」の関係する団体から嫌われるのが嫌で、嫌がられることを彼らにお願いした。喜んで引き受けてくれた。

182の単独補助金(12億4000万円)に廃止、保留などの結論を出した。並の委員ならここまで終わる。彼らはその先まで代行してくれた。結果報告を対

戦った。

まちの有力者からは総スカンだったが、圧倒的な市民の評価を得た。基礎の変更、21階用に刻まれた鉄骨の処分(これは大変だった)、議会の対応、とにかく約束したことの実行は難を極めた。計画段階の変更は難しくもないが建設途中の変更は難しい。30億円の建設費削減、ランニングコスト年間4億円の削減はできた。汗を流した甲斐はあったが、もうこんな大仕事はこりこりである。

「耳を傾ける」ことの重みを知る

当選した当時、若い企業経営者の仲間たちが「参喜会」というのを立ち上げてくれた。ほとんどが現職を推していた。「けつこうやるじゃない」と評価してくれたわけだ。とはいえ、「参喜会」は「三期会」である。三期12年がいいとこだよ、という意味。

ところが三期の途中、合併があつて投げ出せなくなった。1市3町で合併の取り決めをしてきた経緯もあつた。「ここで辞めたら男じゃないよ」なんて3町の町長さんに推されて市長選にでた。

合併を機に、昔の村単位の「行政センター」をつくって行政事務を住民に近づけてきたつもりであつたが合併後、市民満足

象団体すべてに説得してくれたのである。行政はノータッチ、市民が市民を説得してくれたわけだ。大きな声で反論したが、不満をいったりした市民もいたようだが、委員たちの客観的な判断は説得力があつたと聞いた。成功したのは彼らには行政との利害関係が全くなかつたこと、そして「改善」「コスト削減」意識が強かつたことだ。彼らが「従心会」を地で行ってくれたということ。納税している市民の心に従って行動してくれた。

市民の依存意識を変え汗をかいてもらう

「補助金カット」ばかりでは市民から嫌われる。嫌われたくない。

まちづくり基本条例に「参画と協働」という言葉はあるが具体的に何を市民に求めるのか、行政は何ができるのか、具体的施策がないのに気がついた。悩み、思いついたのが「1%まちづくり事業」である。みんなが考え、みんなで活動する、提案が適切であるかどうかは、みんなが決める。「お金は3億円用意しておきます。みんなの汗で事業をやってください。上限はありません」これでスタートした。「まちづくり委員会」で採否を決定し、検証までやっていくれている。行

度は落ちた。どこのまちにも合併反対の人たちがいる。満足度調査の結果は気になる。6年経過した今年度の調査で、やつのことで満足度は上がってきている。

どこのまちでも現職は苦戦をした。負けた市長も多かった。私も辛うじて勝たせてもらった。会の名前が変わった。「耳順会」である。みんなの言うことに耳を傾けなさい、ということだ。若い経営者たちもだんだん年をとってきた。自分にも言い聞かせているのではないか。そして1年前、合併2回目の選挙。ここまでくるといつでも迷う。「辞めることが市民のためになるか」迷いを見透かされたのか、選挙は混戦になった。そろそろ市民に飽きられてきたと対立候補は思ったのだろう。ところがどっこい、「耳順」を忠実にやってきた。圧勝したのだ。

そして会の名前は変わった。「従心会」である。何を意味するのか。おれたちの言うことを聞かないのならこの後は自分の心に従って行動してくれ、ということか。「勝手にすれば」というあきらめの会になった。しかし、どういうわけか会員は増えている。

利害を超えて「市民の心」に従う

若い経営者(だった者)たちは二代目か創業者が多い。厳しい経済環境の中をか

政はあくまでも補助。

年間130件、おおよそ4000万円程度で定着してきた。予算があつても使わない。汗をかき市民が増え、市民の依存意識は少なくなっている。

国には「フリーハンドの交付金」を要求して、市民には「補助金をあげます」ではなくとも情けなく思ってきた。「1%まちづくり事業」は私の作品の中で2重丸、合格作品である。



「緑台トーク」で市民と意見交換